

人格

無限に与えることができる人が、無限に受けることができる。我々は、千万の人によく用いられる材料となろう。

神様からも「あなたがいなければ生きられない」と言われるような人格者となりなさい。

完全なる人格者になれば、生活自体が祈りである。多く祈って、無限なる靈力に接しなさい。これが原動力となって、生活するものとならねばならない。

人格 2

自ら、自分の人格を崇拜できる人となりなさい。

万物に対しても恥ずかしくない崇拜を受ける感じがなければならない。

その次に「私を見習いなさい」と言って、その後に相対的な世界を見つめなさい。

万物を抱いて与える者は、万民から受ける者である。

人を恥ずかしく思わせる私となって、神様に褒められる私となれば、相互関係において喜びでもって因縁づけられる。

※万物…この場合、人間は含まれないで、動物、植物、鉱物などが

該当する。お金や時間も含まれる。

人格 3

人格者とは、自分のことを早く済ませて、他人のことをまず考える人のことをいうのである。

仕事をたくさんやって話が少なければ勝利し、仕事をやらないで話が多い人は失敗する。

熱い人、味のある人、必要な人、手本となる人、先犠後喜する人、情勢と使命を分別する人。

※先犠後喜…おそらく造語。字のごとく、先に(他人のために)犠牲になることで、後の喜びを得る、ということだろう。

大木であるほど、各種の鳥が集まるように、糞をつけて歩いたとしても、内容を整えて歩めばよい。

人格 4

昨日を誇れるもの、きょうを奪われない者、明日を待つ者。

体面を失うな。

私が食べて、寝て、なす一挙手一投足が何のためにあるかを常に考えなさい。

人格 5

人を判断するためには、3年以上研究しなさい。

環境によって変わる葉となるな。

美しいものは単色ではない。

多くの曲折を持ちなさい。人生は豊かでなければならない。

人格 6

人はこれからどうなるかが問題ではなく、私の心情・私の内的基準・私の主体的価値がどうなっているかが一番重要なのである。

自分が無限なる価値的基準の上で因縁を結んで立っていれば不変である。
慌てたりする者は、だいたい相対的な価値や相対的になった目的のみを見つめているためである。

み言で理想を与え、人格で実践を示してあげ、心情で愛を与えなさい。

人格 7

私は、私個人の所有物ではない。私は、6000 年歴史の結実体であるので、歴史的共同所有物なのである。

天も私の体、地も私の体、万民も私の体である。天と地と万民を、私の体のごとく対することのできる人格がなければならない。

人より豊かな人生をもとうとすれば、人より豊かな(長い期間が過ぎても忘れられない)余韻をたくさんもたねばならない。

人格 8

平坦な人生を歩もうと願うな。曲折が多い自然は、かえって見るに美しいではないか。

人間は、まず必ず必要な人、いてもいなくてもいい人、いてはならない人とがある。

神様は、私の生活を通して喜びを味わおうとして、私を訪ねられた。

人格 9

この世では、貧しければ受けることを願うが、我々は貧しい中でも与えなければならぬ。

最後の勝利は、我々が一番貴重なものまでも無限に与え、無限に愛し、無限に犠牲になるところにある。

世界の人類を、善の基準を標準として3種類に分類すれば、反対の人、善を知りながらも積極的に出て自分のものとすることができず緩衝地帯に住んでいる人、そして、善を私の責任としてなそうとする人に分けることができる。

人格 10

この世をコンパスで測るごとく生きるな。

しかる前に、彼の立場に立って、彼よりは私がよくやるという自信をもつようになったとき、まず良い点を褒めてあげてしかりなさい。

与える時に、受けようとすれば、滅びてしまう。我々は、もっているものがなくても、与える心情で生活していこう。

人格 11

我々は、健康もお金もないが、他人を幸福にし、かつ善良にしよう。

復活しなければならない私が残っていることを知り、未来に現れなければならない姿を重要視しなさい。

変わる善を中心としては、一つの世界をなすことができない。中心は揺らがない。深いほど穏やかである。太平洋を見なさい。表面では嵐が起こり、波も立つが、深いところは静かである。それに学びなさい。

人格 12

こまの中心は、回るのか回らないのか分からない地点である。この世がいかに混沌としようと、変わらない中心をもって生活していこう。

与えたものを覚えておくと、必ず返してもらいたいと思うようになる。与えながらも、覚えまいと努めなさい。

友人に与えると約束したものは、必ず与えなさい。約束を破ることは、あなたの人格を損なうものである。

人格 13

大きい器を準備しなさい。小さい器には早く水を入れることができるが、それからあふれ出る水は少ない。しかし、大きい器に水を入れるのは大変だが、黙ってあふれるときには莫大な量の水となる。

金（きん）の価値は、火の中に入れられても、その本質が変わらないところにある。人間の価値も同じである。もし苦勞の道にぶつかって、その志が変質したとするならば、人格者といえないだろう。

私が堂々と生きて、堂々と最後を結ぶことは、ほかの何を得るよりも大きく、ほかの何を失うよりも貴いのである。

人格 14

ない中においてよく与える人なら、ありさえすればどれほどよく与えるだろうか。

私が因縁を結んでいく人には、マイナスにならないようにしなければならない。

柔和謙遜な高い価値の心の前に、低い価値の人格がぶつかれば、壊されて吸収されるのである。

人格 15

麴（こうじ）は和合の原料である。全体を溶かすことのできる麴となりなさい。

善なる人とは、犠牲になる人であり、愛を誘発させる人である。

円満な人とは、四方性が整った人のことである。

人格 16

十年でなった木の実は、十年間の木の精髓が投入されたのである。

沃土は、種が完全に生長することのできる土地である。沃土は、自分のためにあるのではなく、種のためにある。

言ってあげることがある、見せてあげることがある、残してあげることがあると言えるようになれば、世界を主管することができる。

人格 17

見せてあげることができ、自慢し得る者となろう。

人格の中心は、真理にあるのではなく、心情にある。

心の闘いに勝利できない者は、外的との闘いに勝てない。

人格 18

先生は、死んでも怨讐に対する敵対感情をもっていない。ゆえに、み旨は勝利する。

貴い宝物を預けてもらえる人とならなければならない。

天宙が好む人となろう。

人格 19

皆さんが歩んだ道に対して、あとについてくるすべての人々が頭を下げ、礼をすることのできる道を残していかなければならない。

現れない生命力をもって、現せる私とならなければならない。

我々の目標は、墮落前のアダムに帰らなければならない。墮落前のアダムは、神様だけを知って恐れがなかったので、我々も、神様だけに侍って恐れを知らない立場に帰らなければならない。

人格 20

我々は、どのような人とならなければならないのか。神様の代わりに生きる人とならなければならない。

み旨のために闘い倒れて死ねば、そこに香木を植えて、その香木を摘んで万民に向かって香をたいてあげられる人とならなければならない。

歴史的にいくら偉大な人を望んだとしても、現実に現れた一人の価値を知らなければならない。皆さんは、なくてはならない一人として、子のみ旨の道を出発した。主体性をもった現実的な自我を整えなければならない。個性真理体は、宇宙史的な現実の焦点と同じである。

人格 21

千遍、万遍死んだとしても、神様が自慢し得る息子、娘になろうとしなければならない。神様(天)を輝かせるのに、私が肥料になり、土台になろうとしなければならない。

生命の源泉は、どこにあるのか。自分がもっている価値を知らずにいて、それがほかの人の手に渡ると、もったいなく思っ痛哭する、そのような者となつてはいけない。

先生が知っていることは、神様が私を同情せざるを得ないという事実だけである。

人格 22

耳、目、口、鼻が整った顔が、美しい顔ではなく、心と体が完全によく和合された人が、世界で最も美しい人である。

全体目的は、個体目的を支配する。しかし、個体目的を遂行しなければ立つ場がない。

一番高い頂上を占領しようとするのも良いけれど、深い谷間を占領して抱いていれば、永遠なる主人となる。

人格 23

仕事をしたあとでも、神様が自分に対してくださることを、申し訳なく思わなければならない。

人格者は、見て聞いて行う人である。善を中心として見て聞いたことを行うことができないとき、悪主権内に立つしかない。生涯において善なる結果を残すことができないならば、これまた負債を負ったものである。

サタンの讒訴条件に引っ掛かることがなくて初めて、神様は、自分の息子として立てて、命令することができる。

人格 24

個人的な自慢の実績がなくては、我々の自慢をすることができない。

物質を主管することができなければ、大きいことをなせない。最も窮地に追い込まれたとき、そこにおいて小さな物質が、生涯の全人格を破綻させることが起こるものである。

愚かな者は、姿形を見て喜び、知恵のある人は、内容を見て喜ぶ。

人格 25

不義を見て、そのままにしておく者は、良心家ではない。

すべてのものを最も貴く思える人は、監獄にいる。

人間が、無限なる人格の場を自分も知らずに望んでいるのは、主体的な立場にいらっしゃる神様が、無限なる人格の主体としていらっしゃるからである。

人格 26

言葉で人格を評価する時は過ぎ去り、これからは、愛でもって人格を評価する時である。

自慢は、歴史的な自慢をしなさい。天道というのは見えない権威がある。人格者は歴史性を持っている。

恐ろしい人とは、神様を抱いて耐え忍ぶ人である。

信仰者は、変わらぬ人格をもたねばならない。